

Report on Study Tour to the Philippines 2012 organized by Department of
International Culture and Cooperation, Nagoya Gakuin University

2012年度 国際文化協力学科国際協力実習

フィリピン スタディーツアー報告書

～ひとのやさしさに触れて～



フィリピン地図



報告書

目次

1. スタディーツアー概要

スタディーツアーの目的・

日程・参加者名簿 1

国紹介 2

お世話になった方々 3

2. 訪問先記録

フィリピン観光 4~5

JICA/Phivolcs 6~7

青年海外協力隊 8~9

日本大使館 10~11

Panasonic 12

KPAC 13

トンド 14~15

マリガヤハウス 16

アテネオ大学訪問 17

パンダノン村 18~19

カネシゲファーム 20~21

3. スタディーツアー感想

佐竹真明 Mr.Masaaki Satake 22~27

石崎程之 Mr.Noriyuki Ishizaki 28~31

河路直人 Mr.Naoto Kawaji 32~33

中村泰大 Mr.Yasuhiro Nakamura 34~35

奥村直子 Ms.Naoko Okumura 36

棚橋有里 Ms.Yuri Tanahasi 37

泉あやの Ms.Ayano Izumi 38~39

古久根寛二 Mr.Kanji Kogune 40

戸津龍乃 Mr.Ryudai Tozu 41~42

日沖諒太 Mr.Ryota Hioki 43

森千紘 Ms.Chihiro Mori 44

4. その他

チラシ 45

写真集 46~48

編集後記

1. スタディーツアー概要



スタディーツアーの目的と日程

- ① 日本の国際協力について理解を深める ② フィリピンの文化・社会への理解を深める
 ③ フィリピンの人々（若者・学生）との交流 ④ 日本とフィリピンとの関係への理解

	日付	旅程
1日目	8月25日(土)	移動(名古屋→マニラ) / 観光
2日目	8月26日(日)	マニラ市内観光・研修
3日目	8月27日(月)	マニラ・トンド地区における都市低所得地域訪問
4日目	8月28日(火)	国際協力機構(JICA) / フィリピン地震災害研究所訪問
5日目	8月29日(水)	日系企業訪問(パナソニック PMPC / PPDPC)
6日目	8月30日(木)	アテネオ・デ・マニラ大学訪問(うどん作り)
7日目	8月31日(金)	日本大使館 / マリガヤ・ハウス訪問
8日目	9月1日(土)	エバリュエーション / 大学生と一緒にショッピング
9日目	9月2日(日)	移動(マニラ→ネグロス) / オリエンテーション
10日目	9月3日(月)	フェア・トレード団体訪問 / 砂糖農園訪問
11日目	9月4日(火)	マスコバド糖工場視察 / カネシゲ・ファーム訪問
12日目	9月5日(水)	カネシゲ・ファーム / 市内観光・ネグロス博物館
13日目	9月6日(木)	青年海外協力隊訪問 / マナプラ・ハイスクール訪問・ホームステイ
14日目	9月7日(金)	ホームステイ / エバリュエーション
15日目	9月8日(土)	帰国(ネグロス→マニラ→名古屋)

引率教職員

佐竹 眞明

(Masaaki Satake, Ph.D)

石崎 程之

(Dr. Noriyuki Ishizaki)

参加学生 外国語学部

国際文化協力学科

4年: 川路 直人

(Mr. Naoto Kawaji)

中村 泰大

(Mr. Yasuhiro Nakamura)

[8/27~9/1]

2年: 奥村 直子

(Ms. Naoko Okumura)

棚橋 有里

(Ms. Yuri Tanahashi)

木下 裕貴

(Mr. Hiroki Kinoshita)

[8/28・8/30]

1年: 古久根 寛二

(Mr. Kanji Kogune)

日沖 諒太

(Mr. Ryota Hioki)

戸津 龍乃

(Mr. Ryudai Tozu)

森 千紘

(Ms. Chihiro Mori)

泉 あやの

(Ms. Ayano Izumi)

フィリピンの概略

1.面積

299,404 平方キロメートル（日本の約 8 割）。7,109 の島々がある。

2.人口

約 9,401 万人（2010 年推定値、フィリピン国勢調査）

3.首都

マニラ（首都圏人口 1,155 万人）

4.民族

マレー系が主体。ほかに中国系、スペイン系及びこれらとの混血並びに少数民族がいる。

5.言語

国語はフィリピノ語、公用語はフィリピノ語及び英語。80 前後の言語がある。

6.宗教

国民の 83%がカトリック、その他のキリスト教が 10%、イスラム教は 5%。

7.平均寿命

男性 67 歳、女性 73 歳

8.識字率

93.4%（2003 年調査）

9.大学進学率

約 30%（職業訓練専門学校レベルのものを含む）

10.元首

ベニグノ・アキノ 3 世大統領（2010 年～）

フィリピンの略史

14－15 世紀 イスラム教が伝わる イスラム王国スールー王国誕生

1521 マゼランの到着

1571 - 1898 スペイン植民地

1901 - 1935 米国植民地

1935－41 独立準備政府

1941－45 日本が占領（太平洋戦争）

1946 独立

お世話になった方々

KPAC

Ms. Harriet Escarcha

Ateneo de Manila University

Prof. Hiroko Nagai

Prof. Karl Ian Cheng Chua

Prof. Tito Valiente

Panasonic Manufacturing Philippines Corporation

西脇直哉社長

田宮和一副社長

早雲忠彦さん

Panasonic Precision Devices Philippines Corporation

老松宗幸社長

JICA フィリピン事務所

Ms. J-ann Miliar

Ms. Kristina Santiago

中村隼人さん

日本大使館

福永敬さん 一等書記官

宮城鎮さん

APLA

大橋成子さん

吉澤真満子さん

Alter Trade Corporation

Paolo Guinabo

Boyet Gaduya

Japan Overseas Cooperation Volunteers (青年海外協力隊)

菅野良浩さん

Pandanon Integrated Balangon Banana Farmers Association

Efraim Mallorca

Kaneshige Farm Rural Campus

Alfredo Bodios

Carlos Barcoma



Manapla Negros Homestay

Ms. Tamar Teressa Genobis

Ms. Monina Pico

Ms. Pinky Tubaludu

Ms. Diana Sombero

Ms. Mary Angeline Da-anoy

2. 訪問先記録



フィリピン観光

河路直人 Naoto Kawaji

マニラ市内観光

8月25日午後マニラに到着しました。始めに、キアポに行きました。キアポ教会前には、キント・マーケットは大勢の人で賑わっていました。また、キアポ教会では、ブラックナザレ像を見ることができました。触ると難病が治るなどの伝説があります。その後中華街を歩きました。

8月26日には、フィリピンの歴史を学ぶに行きました。先ず、リサール記念碑を見に行きました。

その後にイントラムロスに行きました。イントラムロスは16世紀にスペイン人によって建てられました。マニラ最古の地区であり、スペイン語で壁の内側という意味です。壁で囲まれた都市または要塞を意味しています。そして、第二次大戦でそのほとんどが破壊されてしまったのですが唯一無事であった、サンオーガスティン教会にも私たちは行きました。こちらは、世界遺産にも登録されています。そのとなりに元修道院で、現在は、博物館となっており、そちらも見学しました。

午後には、サンチャゴ要塞に行きました。こちらは、公園内にあり、有料です。サンチャゴ要塞は様々な歴史的出来事があった場所で、フィリピンのことを知る上でとても重要な場所です。要塞内には地下牢等が今でも残っており、近くにパシッグ川が流れ、そこから水を引いて溺死させていたそうです。また、リサールもここに収容され近くの広場で処刑されたことで有名です。処刑された場所には後に、前述のリサール記念碑が建てられました。記念碑の周辺は公園として整備され、リサール公園と命名されています。

(写真左上から キアポ教会前
リサール記念碑
サンオーガスティン教会
サンチャゴ要塞)

そして、見学でしっかり歴史を学んだ私たちは、現代のフィリピンを学ぶべく、モールに行きました。フィリピン最大手のモールチェーン SM (シューマート) が経営するモール・



オブ・エイジア Mall of Asia に行きました。アジア最大規模ともいわれています。アイススケートリンク、映画館があり、ショップが 600 店舗、飲食が 150 店舗、駐車場が 5000 台収容となっており、多くの人でとても混んでいました。牛井の吉野家、服のユニクロなど、日系企業も出店しており、また日本でもお馴染みの海外ブランド店も多くありました。また、各出入り口では、厳重に荷物チェックがされており、日本では飛行機に乗る時にしか馴染みがないためびっくりしました。



ネグロスでの観光

9月2日午後にネグロスに到着しました。マニラとは違って自然の豊かさに感動しました。サトウキビの作付けが盛んな島ですが、訪問した村ではバナナ、野菜、ココナツなどいろいろな作物がつくられていたからです。

西ネグロス州の州都バコロド市内では、博物館に行きました。博物館は改装中でしたが、展示品が全て一階に降りていました。展示物は、フィリピンの歴史、植民地であった時の民芸品や歴代大統領の肖像画がありました。また、もともと一階にある、有名なおもちゃの博物館も見てきました。とても多くの人形が展示しており、世界中から人形を集めたそうです。この博物館は外観も美しいため観光スポットとして人気となっています。



(写真左上から モール・オブ・エイジア内
モール・オブ・エイジアのシンボル
ネグロス博物館)

JICA フィリピン事務所

泉 あやの Ayano Izumi

4日目に JICA フィリピン事務所を訪ね、クリスティナ・サンチャゴさんから JICA 事業について説明していただいた。

JICA（国際協力機構）は日本政府の開発途上国支援を実施する機関である。日本の ODA には無償資金協力、有償資金協力、技術協力があり、フィリピンではこれら 3 つのスキームでプロジェクトを実施しているようだ。

有償資金協力では、資金を低利で貸し、上下水道や道路などの経済成長を助けるインフラの建設を行っている。技術協力では、専門知識を持つ日本人専門家を派遣し、フィリピンの人を日本に送って研修を受けてもらっている。無償資金協力では、貧しい地域で生活に密着した施設（井戸、学校、病院など）を造っている。この資金は返却する必要はないようだ。具体的な事例として、以下のプロジェクトの説明を受けた。

有償資金協力：「スービッククラーク・タルラック高速事業」

中部ルソンにある元アメリカ軍基地だった工業団地をつなぐ高速道路を、円借款額 400 億円で建設し、08 年 10 月開通。

無償資金協力：「気象レーダーシステム整備管理」

老朽化や画像の乱れ・読み取り等の問題が発生し、台風の監視業務が困難となっていたため再建設された。

技術協力：「高生産性稲作技術の地域展開計画プロジェクト」



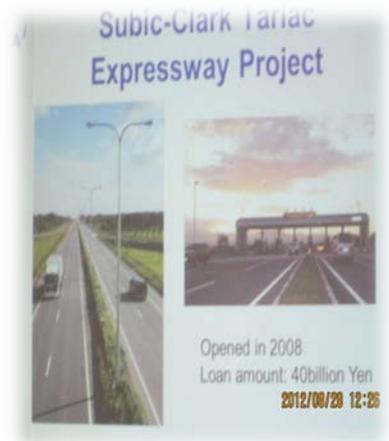
コメはフィリピン人の主食であり最重要穀

物である。しかしながら単収は低く、品種改良、機械化、栽培体系の確立が強く求められてきた。ミンダナオ地区でも、コメは最重要穀物であるので、コメを中心として農業訓練、サポートなどを行っている。

サードカントリートレーニング

南南協力の一部で、開発途上国の中で進んだ国が別の国に対して行う研修を言う。フィリピンはミャンマーと行っている。ミャンマーとフィリピンは気候などの環境がよく似ており、技術水準も日本とミャンマーより近い。そのため、日本で行う技術研修より、理解が進みやすくコストの面でも有利だそうだ。

今回初めて JICA 事務所に訪問することができ、とても良い経験をする事が出来ました。3つのスキーム使った活動をはじめ南南協力、NGO・NPO と共同で幅広く国・地域のために活動を行っていることを知り、JICA についてさらに興味がわいてきました。これからも JICA が国・地域の発展のために活動していくことを期待しています。



フィリピン地震火山監視強化と防災情報の利活用推進プロジェクト

泉 あやの Ayano Izumi

フィリピンは西太平洋のプレート沈み込み帯に位置し、日本と同様に世界で最も地震・火山の活動が活発な国の一つである。東側のフィリピン海溝ではフィリピンプレートが、西側の海溝ではユーラシアプレートが沈み込み、その中央には国を南北に縦断するフィリピン断層が存在する。フィリピンは1日に20の地震、1年に200の有感地震、過去400年には90の大きな地震が記録されており、数多くの自然災害を引き起こしている。

そのため、フィリピン政府からの要請を受けて、JICAは地球規模課題対応国際科学技術協力案件として、フィリピン地震火山研究所 (PHIVOLCS) に対して2010年2月から2015年2月までの5年間にわたる技術協力を行っている。今回、PHIVOLCSを訪問し、地震火山の監視および防災情報に関する技術を見学させていただいた。

PHIVOLCSには2つの地震情報伝達システムがあった。右の写真は、規模の大きな地震の情報をリアルタイムで感知するシステムである。このシステムはマグニチュード5以上の地震を感知できるようになっている。



また、別のシステムでは発生1週間以内の地震が形や色で識別されて示されていた。地震と同時に津波も感知できるそうである。どちらのシステムでも地震や津波が発生するとサイレンが鳴り、副所長が常備している携帯にリアルタイムでメッセージが送られるようになっている。このため、東北地方太平洋沖地震が発生した当時、PHIVOLCSでは発生当初からマグニチュード9.0だと分かっていたそうだ。



火山情報は火山の近くに設置してある機器から伝達される。左の写真は情報がどのようにして伝達しているのか表している。フィリピンには23の活火山があり、その中でも最も活発な6つの火山を毎日リアルタイムで観測している。GPSが設置されているため、地盤のひずみを見ることもできるそうだ。

日本からは短期で専門家が派遣されており、ここで集められた情報は日本の気象庁と共有されるそうだ。

全世界の情報を共有し、毎日の自然災害の観測、発生した際の対処など様々な活動を行っており衝撃を受けました。未曾有の自然災害が起こらないことを願っています。

青年海外協力隊

森千紘 Chihiro Mori

青年海外協力隊の制度

青年海外協力隊とは独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する海外ボランティア派遣制度のことをいう。満 20～39 歳までの健康で日本国籍を持つ者を募集対象としている。派遣分野には農林水産、教育、保健衛生などがあり、さらに 120 以上もの職種に分けられている。

フィリピンに派遣されている協力隊と配属先

私たちはフィリピン西ネグロス州タリサイ市で、TESDA が運営している職業訓練校で活躍しておられる協力隊の、菅野良浩さんにお会いした。

TESDA とは技術教育技能開発庁の事で、ここではさまざまな専門技術を教育し、職業訓練も実施している。ここには9つの専門コースがあり、期間は5日～3か月と短期間である。また入学年齢は18歳からで、20歳前後の生徒が多い。コースによっては、国家資格を取得でき、またそれに相当する資格を取得できるものもある。

調理コース↓



電気配線コース↓

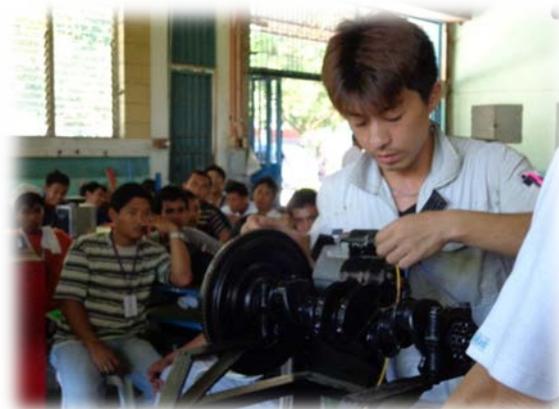


金属溶接コース→



活動内容

菅野良浩さん（写真・右）は、現在 31 歳で、TESDA の自動車整備コースで、自動車の修理・配線の仕方を教えている。派遣期間は、2010 年 11 月から 2012 年 10 月までの 2 年間である。生徒数は 35 人で 18 歳～50 歳代の生徒がいる。1 ターム 45 日のコースである。



授業は、ビデオを用いたり、実際に故障した自動車を直しながら教えることもある。教材が不足しているため、菅野さんが廃材から教材を作ることもあるそうだ。



←菅野さんが廃材を用いて作った教材

応募の動機

菅野さんは中学生の頃から海外でのボランティアに興味を持っていたそうだ。青年海外協力隊の訓練施設が福島県二本松市にあり、20 歳の時に訓練所に自動車のセールスで訪れた時に、JICA や青年海外協力隊のポスターをもらった。それがきっかけで、28 歳の時に青年海外協力隊に応募された。派遣される前は、4 年間自動車整備会社で自動車整備をされていた。

任期終了後

菅野さんは、日本に戻られ日本で仕事をされるそうだ。菅野さんの出身は福島県ということもあり、原子力発電事故の除染作業や、エネルギー関係の仕事に就きたいと思っているそうだ。

菅野さんから学生へメッセージ

「海外で仕事をする場合、相手とコミュニケーションをとることは大切なことだと思います。コミュニケーションをとるためにも語学、特に英語は学生のうちに身に付けておくと良いと思います。また、フィリピンに来て日本に対する考え方が変わり、日本の良さを知ることができました。」とメッセージをいただきました。

日本大使館～ミンダナオ和平への日本の支援～

中村 泰大 Yasuhiro Nakamura

日本大使館にて、一等書記官・福永敬氏のお話を伺った。福永氏は国際協力機構（JICA）から大使館へ出向し、ミンダナオ和平を担当している。以下、お話の概要を記す。

1. ミンダナオの概況

面積：フィリピン全体の3分の1

人口：フィリピン全体の4分の1

民族：多様な民族の混在（20%がイスラム教徒）

資源：豊富な地下資源

産業：第一次産業が中心

2. ミンダナオの略史

1380年にミンダナオ島にイスラム教が伝わり、約300年のスペイン統治期、そして約50年のアメリカ統治期を経て1946年にフィリピン共和国として独立した。また、アメリカ統治時代の移民政策により、ルソンやビサヤの農民がミンダナオへ移住したため都市部を中心にキリスト教徒が増えていった。また、大規模なプランテーション開発が進み、各地で土地所有権の問題が発生。1971年のモロ民族解放戦線（MNLF）の設立により紛争が始まり、96年、政府との和平合意が成立したが、分派のモロ・イスラム解放戦線（MILF）との和平は成立していない。

3. ミンダナオの紛争構造

・マクロレベル

宗教の対立や土地所有権の問題を基軸にした、キリスト教とイスラム教の対立がある。

・メゾレベル

利害関係による武力対立が武装した集団（国軍、反政府軍、自警団、民兵など）の間で衝突している。

・ミクロレベル

紛争影響地帯で治安が不安定なため、泥沼の武力抗争が長期にわたって生じている。

4. 日本の支援戦略3本柱

・国際コンサルタントグループ（ICG）

マレーシアが仲介国となって定期的にクアラルンプールで開催される和平交渉へ日本は英国、トルコ、サウジアラビアと4つのNGOとともに国際コンサルタントグループ（ICG）としてオブザーバー参加をする。日本からは日本大使館政務班公使が参加をし

ている。

- ・ミンダナオ国際監視団 (IMT)

2004年に開設された ミンダナオ国際監視団 (IMT) は、当初マレーシア・ブルネイ・リビアのイスラム国の軍人が中心で、停戦合意違反を監視する目的で始まった。その後、市民保護や社会経済開発支援の部門が開設され、2006年から日本は社会経済開発部門に大使館書記官が参加をしている。

- ・日本の復興開発支援 (J-BIRD)

草の根の支援を通じて、紛争で開発から取り残された人々に必要な小規模インフラの整備をおこなっている。

5. J-BIRD の特色

- ・無償資金協力「草の根・人間の安全保障無償」

日本大使館による1件1000万円以内の小規模インフラ案件で、小中学校校舎・給水施設・農場施設などの建設や補修事業。

- ・有償資金協力「ARMM 社会基金事業」

JICAによるムスリム・ミンダナオ自治区 (ARMM) 地域全体で、村落開発の小規模インフラ事業、地域開発の中規模インフラ事業。

- ・技術協力

JICAによる ARMM 地域での、稲作営農改善・地場産業育成など地域産業の振興。

6. 感想

「日本大使館」というのはよく耳にする言葉だったが、なかなか活動内容を知る機会は今までなかった。そして、国際協力の第一線で働かれている福永氏のお話は、国際協力を学んでいる私にとってとても興味深いものであり、日本の支援は、多種多様でしっかりと現地のニーズに合わせて支援をしているという印象を受けた。また、日本大使館で働かれている本校卒業生・宮城鎮氏の活躍を拝見することができ、今回の日本大使館訪問では、とても有意義な時間を過ごさせていただいた。



Panasonic PMPC&PPRDPH

戸津龍乃 Ryudai Tozu

PMPC(パナソニック・マニファクチャリング・フィリピンズ社)

PMPC 社は 1967 年に設立され、エアコンなど白物家電を主に製造している。同社はウィンドウエアコンを年間 15 万台製造しており、6 割が輸出、残り 4 割がフィリピン市場に出回る。高層ビルが立ち並ぶ香港はウィンドエアコンが人気で、輸出の 8 割を占めている。



PMPC 社では、フィリピンの消費者を購買力によって富裕層の A 層から貧困層の E 層にまで分類しており、A 層から C 層と D 層の一部をターゲットとしている。フィリピンは格差が大きく、A~C 層は全世帯の約 20%に過ぎず、今後は D、E 層から C 層への移行が必要不可欠だそうだ。

PMPC 社では、フィリピン人の生活スタイルにあわせて製品を設計している。例えば、日本にはない一層式の洗濯機を製造している。洗剤を捨てずに何度でも続けて洗濯が出来るという特徴があるのだという。最新式の全自動洗濯機も販売しているが、最富裕層の A 層に売れてないそうである。A 層はメイド（家政婦）を雇っており、「最大のライバルはメイドさん」という言葉に、フィリピンらしさを感じた。

この工場では日本の品質基準と安全管理を徹底していた。工場での作業は安全第一で、例えば、フォークリフトでの運搬時に接触事故が起きないように、死角になるところにはサイレンの光と音で警告するようになっていた。品質管理に関しても、安全を確保するうえで重要な部品にはシリアルナンバーが付けられ追尾が可能となっており、部品の不良により発火や感電が起きないように工夫されていた。

PPRDPH(パナソニック・プレジジョン・ディバイセズ・フィリピンズ社)

2000 年に設立されたパソコン用の精密電子部品、主に光学ドライブを製造している。世界で流通するノートパソコンの DVD の 5 割はフィリピン製であり、日本製ノートパソコンのブルーレイの 8 割はこの工場で作られている。

フィリピンに工場を設置した理由は、フィリピン人は覚えが早く英語を話せる、労働争議が少ないからだそうだ。ここでは、技術教育技能開発庁が行う職業訓練として、OJT の学生を雇



っている。学生は正規雇用につながる場合もあり、会社としては 75%の賃金で雇うことが可能である。双方が OJT のメリットを共有していた。

KPAC（金光教ピースアクションセンター） KPAC・KPACICについて

古久根寛二 Kanji Kogune

KPAC とは金光教と呼ばれる日本の新宗教の NGO でありアジアの子供たちにさまざまな形で協力している団体である。また、KPACIC は金光教ピースアクションセンターインフォメーションオフィスの略で、フィリピンのマニラに事務所を構え、フィリピン各地で活動している NGO である。



右端が KPACIC 代表

ハリエツト・エスカーチャさん。

KPACIC の目的

- ①人権と国際人道主義法、世界平和の促進。
- ②政治的、宗教的信念を迫害された人々への支援。
- ③子供、女性、先住民族、地域開発、世界平和といった項目を取り扱う私設および公的機関、NGO、団体間のネットワーク作り。
- ④大学や金光教信者のスタディーツアーの受け入れ。
- ⑤KPAC がフィリピンのパートナーNGO に対し、監査機関としての役割。

KPAC マニラ事務所の活動

- ①3～6歳の子供たちの精神的・肉体的な成長をサポートする活動をマニラ首都圏のマラボン市のポトレロ、マニラ市のスラム地区トンド、セブ島のマンダウエ市で行っている。活動内容は、毎日の教室での活動、学校で子供たちをどこかへ連れていく、およびさまざまな記念行事の開催。
- ②栄養保健プログラムとして、給食活動、適切な栄養がとれるような活動、他に健康調査を行っている。健康調査の内容は、毎月体重を計測する、家庭を訪問などである。
- ③親の教育として、健康に関するワークショップを開催、社会・経済・政治に関する学習する機会を与える、育児の為にセミナー活動などがある。
- ④コミュニティー開発として、地域の清掃活動、医療検診、歯科検診などの活動。
- ⑥ミンダナオ島での活動は、子供の教育、零細事業への支援、災害の被害にあった地域に食料などを支援。
- ⑦ネットワーク作りと政策提言活動では、教育ネットワークの整備、ボランティア活動、日本の政府開発援助を監視するなどの活動を行っている。

活動の成果

3～6歳の子供を支援するプログラムでは1996年からメトロマニラ、マンダウエ市、バギオ市、ケソン州サリウヤ市、ダバオ市で10928人の未就学時に支援を供給できた。

トンドとフィリピンのスラム

トンドとは、マニラ市北西部にあるスラムで、ガイドブックにはトレドを含むスラムを「立ち入り厳禁」と記載している。1990年には、フィリピン全土では1880万人が貧困地域に住んでおり、マニラ首都圏では520万人の都市貧困者が生活しておりそのほとんどが農村からきた人である。

また、都市部に貧困地域が生じる原因は、農村部で自分の職に満足していない人が都市部に出れば、何か職があるのではないかと考え、こうしてこのトンド地域のように都市部に貧困地域が生じる。かつてのトンドのゴミ捨て場では、ゴミの中から木材を拾い、それを燃やして炭にして売る人もいた。



トンドの家

実際にトンドに住む人の家を訪問してわかったこと

私たちは3つのグループに分かれてそれぞれ家を訪問した。なので、3つのグループをそれぞれグループ1、グループ2、グループ3とする。私たちグループ1が訪問した家庭は5人家族だった。この家の子供たちの将来になりたい職業は6歳の長女が医者になって子供たちを助けると言っていた。4歳の次女は看護婦になり姉を支えると言っていた。3歳の長男は警察官になって悪い人たちを退治すると言っていた。

この家庭は奥さんが家計を支えていたが、奥さんは10年都市でパソコン関係の仕事をしていると言っていた。だが、1日の稼ぎは日本円で1000円にも満たないと言っていた。どんなときに幸せを感じるかと聞くと、子供が健康なら毎日幸せと言っていた。家の近くにあるヘルスセンターは診療費は無料だが、薬は少な



グループ1が話を伺った家族



グループ2が話を伺った家族

いと言っていた。この家庭はお金がないので母の2階建の家に住んでいると言っていた。また、この2階建ての家に母の兄弟の5つの家族が住んでいると言っていた。

グループ2は7人家族で子供は5人で長男が警官になりたいと言っていた。長女は英語の先生になりたいと言っていた。やはりこの家庭も家族と一緒に幸せと言っていた。この家庭は3つのグループの中では比較的裕福だったが、それでも2人同時に大学に入れるのは厳しいと言っていた。

グループ3の長男は無職で次男はペディキャブという自転車タクシーで1家を支えていた。



グループ3が話を伺った家族

まとめ

やはりどの家庭も今の生活には満足していなかった。子供の時からずっと大人になってもトンドで暮らしているという人もいた。このように、世代をまたいで貧困が連鎖しているので、教育を十分うけて企業などに就職することが解決策なのではないかと感じた。その意味でKPACが行っている幼稚園教育の実施は重要である。



トンドで会った子供たち

マリガヤハウス

戸津龍乃 Ryudai Tozu

J F C

JFCとは、Japanese Filipino Childrenの略式で日比混血児の総称である。バブル時代に日本にエンターテイナーとして出稼ぎにきた女性と日本人男性との間に生まれた子どもも多く、父親が行方不明になっているという問題が多くある。

マリガヤハウス

JFCネットワークというJFCの問題を扱っているNGO団体が東京の西新宿にある。マリガヤハウスとは、その団体とJFCを持つ家庭とを介している組織である。身元不明もしくは養育を拒否している父親に対してJFCの母親から依頼があった場合、マリガヤハウスで父親の名前・住所・電話番号などを聞き、その情報に基づきJFCネットワークが検索する。この団体は子どもの権利として、認知と養育を求めている。母親と連絡不通で連絡先が分かり喜んでもらえるケースもあるが、仕方なく認知し養育する場合や、認知も養育も拒否される場合もある。

父親の連絡先が判明した場合、マリガヤハウスは月1回3ヵ月に渡り3回の手紙を父親に出す。返事がない場合、家庭裁判所に訴える。裁判ではJFC弁護団がボランティアで弁護する。裁判費用は法テラスが負担してくれるため、母親の負担はない。しかし、裁判を起こすために必要な書類は母親に負担してもらおう。日本人の父親の生活が苦しい場合、養育費を求めないという例外もある。



ケソン市のマリガヤハウスにて:左から4人目の方がマリガヤハウスの河野直子さん



マリガヤハウスのアレンジで、JFCの家庭に訪問した。アマンダさん(仮名・母親42歳:写真向かって左側)は、エンターテイナーとして7回来日し、そのときビリー君(仮名・子供15歳)の父親と知り合った。父親は、生前にフィリピンに会いに来たり、アマンダさんのために家を購入し、月5万円の養育費も出していた。しかし、男性が亡くなったため、現在、死後認知裁判をし、認知と日本人国籍の取得を求めている。

現在アマンダさんは再婚しておりフィリピン人の夫と、その夫との間の子ども(8歳)がいる。ビリー君が日本国籍を取得できれば、日本で働かせたいと希望している。しかし、日本も不景気であるため日本国籍が取れたからといって働ける確証があるとは限らないと感じる。

ATENEO DE MANILA UNIVERSITY

森千紘 Chihiro Mori

大学紹介

アテネオ・デ・マニラ大学は、創立 1859 年 12 月 10 日の、(ローマ)カトリック系の私立大学である。民族英雄ホセ・リサール、ペニグノアキノ 3 世、現大統領も学んだフィリピンにおけるトップクラスの大学である。現在、名古屋学院大学の交換留学で、国際文化協力学科から 3 人がアテネオ大学に留学中である。



うどん作り

フィリピンでも手に入る食材を使うことで、後でアテネオの学生たちだけでも作ってもらえるようにしました。英語でうどん作りの説明ができるか、うまく作ることができるか、心配していましたが、うどん作りはうまくいき、学生たちと仲良くなることができ、楽しい時間を過ごすことができました。その後、アテネオの学生たちの案内によって、キャンパスツアーをしていただきました。充実した施設を見て、留学してみたいという気持ちが湧いてきました。

アテネオの学生たちはとてもフレンドリーで、日本語と英語での会話でしたが、話は尽きませんでした。後日、ショッピングやごはんに連れて行ってくれたり、思い出に残る交流ができました。



訪問先

PIBFA (パンダノン・バランゴン生産者協会) barangay officials

ネグロス西州 DSB (ドン・サルバドール・ベネディクト) 地域にあるパンダノンは、バコロド市から約 39km。村の全世帯 494 家族のうち、21 家族が所属している。入会条件として、一家族あたり、100 本のバナナを持つこと。

主な活動

- ・モデル農園づくり

ネグロス島は、「砂糖の島」として知られるほどサトウキビの生産が有名であった。しかし、1980 年代の国際砂糖相場の暴落により発生した砂糖危機の後、元農園労働者や山間部のバナナ生産者たちがサトウキビ生産だけに頼らない農業に取り組み始めた。

今回、訪れたパンダノン村は、山間部にもかかわらず、多様な農業を実践していた。



↑バナナ



↑山間部でも育つパイナップル



↑ コーヒー豆の栽培



↑ 大規模なモデル農園

・生産者同士の交流・会議

1991年、政府による農地改革が適用され、自作農の数が増えていった。そして1996年、この農園のバナナをオルタートレードが買い付けをしてくれるようになった。2006年にパンダノン村生産者同盟を結成した。

2006年に生産者協会が設立されるまでは、農業は個人レベルの問題であって、家族や知人以外の交流があまりなかった。しかし、協会設立後、地域レベルの考えになって皆で助け合うことができるようになった。また、生産者を一団体とすることによって、今までのように各々が遠くへ足を運ばずに、まとめて出荷できるようになった。

・若い世代の育成

他の村から農業や畜産の技術を学びに研修生が滞在している。彼らは皆、大学へ行ったかったのだが、一家族5~7人なので自分より年下の兄妹たちに学校に通ってもらいたいと、家族の生計に役立てられるように研修に来た子ばかりであった。ここで、研修をして自分の村へ帰り、学んだ農業や畜産の技術を村の人たちに伝えるそうだ。



近隣に住む元気な子供たち



温かく迎えてくれたパンダノン村の方々

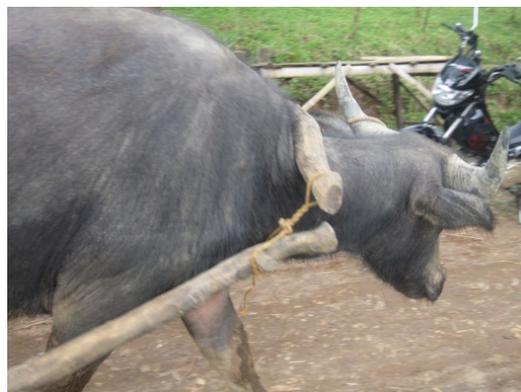
KF-RC (カネシゲファーム・ルーラルキャンパス)

日沖諒太 Ryota Hioki

活動内容

① 多種多様な実践農業

5ヘクタールに広がる農場(カネシゲファーム)では、養豚と野菜生産を中心とした循環型有機農業を実践している。豚以外にも、鶏、ヤギ、アヒル、七面鳥、カラバオなど、様々な動物が暮らす農場はいつもにぎやかである。



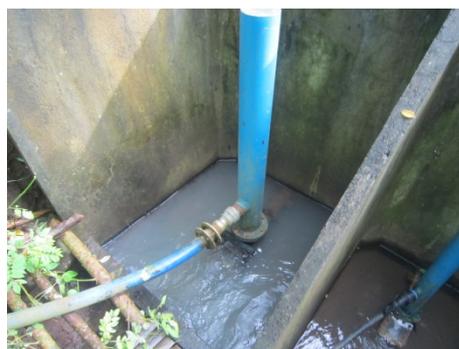
↑フィリピンでカラバオと呼ばれる水牛

② 地域循環システムの導入

豚舎から出る糞尿を利用した循環システムとして、バイオガスプラントとBMW（バクテリア・ミネラル・ウォーター）技術の複合設備を構築し、農場内のエネルギー自給に向けて取り組んでいる。その他、ラムポンプ（自動揚水器）などの適正技術も導入している。



↑豚舎で飼われている豚



↑ラムポンプで生活用水を家屋まで送る

③ 若い世代の指導

地域の次世代の担い手となる若者たちが毎期、2～3人募集され研修生として住み込み、こうした農業技術や適正技術を学んでいる。こうした取り組みが注目を集め、近隣の小学校、行政、海外からの訪問・視察も多く受けるようになった。ここで学んでいる研修生は、

このカネシゲファームを大きくしたい、自分たちの村に帰って農業や畜産を皆に指導していきたくて目的は様々だが、意欲的に学び、作業している。今では彼らの力なしでは農作業が回らないそうだ。

BMW技術について

BMWとは、B＝バクテリアの働きで

M＝ミネラルバランスに優れた生き物に良い

W＝水を作ります の略。

自然界では、落ち葉や枯れ葉、生き物の死骸などがバクテリアによって分解され、水や土を作っている。そのことで“生態系の循環”を保ち、その中心を担うのがバクテリア。BMW技術は、バランスよく微生物を活性化し、生き物にとって“よい水”“よい土”を作り出す技法である。この水を養殖池にも利用している。また、豚にもこの水を与えることで腸内がキレイになって肉質が良くなる効果がある。



3. スタディーツアー感想



国際協力と夢・・・フィリピンへのスタディツアーに寄せて

引率教員 佐竹眞明 Masaaki Satake Ph.D.

ツアーのあらまし

2012年8月25日(土)から9月8日(土)まで2週間、東南アジアのフィリピン共和国でスタディツアーを行った。最初の1週間はマニラ首都圏、後半の1週間はビサヤ諸島の西ネグロス州である。参加学生は8名。国際文化協力学科の1年生5名、2年生2名、4年生が1名である。マニラ首都圏ではフィリピンで活動する日本の民間国際協力団体(以下、非政府団体 Non-Governmental Organization の意味で NGO と略す)・日本アジア相互交流センター(略称 ICAN)でインターンを務める学科4年生も加わった。さらに、本学と交換留学関係にあるアテネオ・デ・マニラ大学に留学する学科2年生も一部マニラのプログラムに参加した。概ねマニラ9名、ネグロス8名という布陣で学生が参加した。

日本の政府や NGO によるフィリピンに対する国際協力、そして、フィリピンの文化・社会について理解を深めるということが、ツアーの狙いだった。さらに、日本とフィリピンとの関係についても考えてもらいたいというのが、ツアーを企画した教員の意図だった。

国際協力については、日本の政府開発援助(ODA=Official Development Assistance)を実施する独立行政法人・国際協力機構(JICA=Japan International Cooperation Agency)のフィリピン事務所、JICA が派遣する青年海外協力隊の派遣地訪問を行った。JICA が支援したフィリピンの政府機関・フィリピン地震災害研究所も訪れた。合わせて、在フィリピン日本大使館も訪問し、ミンダナオ島におけるキリスト教徒とイスラム教徒との紛争に関連する平和の達成に尽力する大使館職員の方の説明もうかがった。

他方、NGO による国際協力に関しては、金光教平和活動センター(KPAC)による都市貧困層向けの支援活動、とりわけ保育活動、日本人男性とフィリピン女性との間に生まれ、諸事情により父親の認知を受けられない子どもたち(JFC=Japanese Filipino Children)を支援するマリガヤ・ハウスを訪れた。さらに、西ネグロス州では砂糖キビの作付けのみに依存せず、農業を多角化し、より安定した生計を実現すべく農民支援を続ける APLA(あぷら Alternative People's Linkage in Asia)、オルタートレード社の活動現場を訪問した。

フィリピンの文化社会については、マニラや西ネグロス州での市内観光、KPAC 事業地マニラの都市貧困層地区への訪問、アテネオ・デ・マニラ大学の学生との交流、APLA の農業研修農場=カネシゲ・ファームにおける研修生との交流、西ネグロス州マナプラ町でのホームステイなどを通じて、理解を深めた。

そして、日本とフィリピンとの関係については、前記の政府や NGO による協力・支援、JFC の問題のみならず、日系企業も訪れ、緊密な経済関係にも気づくことができた。以下、「幸せと夢」というテーマにそって、ツアーで考えたことを記していく。

幸せ・夢・・・トンド

ツアーに参加した学生たちがフィリピンの人々にどういう時に幸せとを感じるか、そして、若者の夢は何か、尋ねていた。とてもいい質問だと思う。

マニラの都市貧困層地区トンドの狭苦しい家で、学生が32歳のお母さんエディセル・タガパンさんに、どんな時、幸せですかと質問した。エディセルさんはコンピューターの専門学校を卒業、マカティの会社でコンピューターにデータを入力する仕事につく。ハイスクール2年を終了した夫ジョージ(33歳)さんは専業主夫であり、調理や育児を担当する。夫婦には6歳で小学1年の娘マリース、4歳で前記KPAC経営の幼稚園に通う娘ジュリアン、3歳で未就学の息子ジョージ Jr.がいる。エディセルさんが稼ぎ、1日の収入は445ペソ(890円)。トンドからは遠いマカティまでの交通費だけでも大変だと思う。

フィリピンでは、家庭内分業について、稼ぎ頭を「家の柱」haligi ng tahanan、家事・育児担当を「家の光」ilaw ng tahananという。柱が夫、光が妻という家庭が多いが、タガパン家では妻が「家の柱」、夫が「家の光」を担っている。

ここで、子どもそれぞれの夢は何かと、学生が聞いた。お母さんが意味を取りかねていたの、仕事は何か、と私が口添えした。マリースちゃんは小児科の医者になりたい、ジョージ Jr.君は警官になって、悪い人を捕まえたい、ジュリアンちゃんは看護師になって、お姉ちゃんを手伝いたいとのことだった。

また、お母さんの気持ちは「仕事が大変。子どもにかかる費用が気にかかる」とのことだった。ここで、学生がどんな時、幸せですかと聞いてきた。エディセルさんは言った。「子どもが元気な時。毎日、みんなが健康な時、私は幸せを感じる。」

これは一般的にみんな元気なら、幸せという意味にもとれる。だが、政府に何を期待するかと学生が質問すると、彼女は政府の職員の給料をあげるのもいいけれど、地域のヘルス・センター(バランガイ診療所)にもっと薬があればいいと答えた。つまり、バランガイの診療所の薬は無料だが、ない薬は自分で買わなければならない、フィリピンにおける薬の値段は高いので負担が大変であるという意味である。さらに、政府は教育に対する支援をもっとしてほしいとも言っていた。公立の小学校・ハイスクールは無償教育だが、美術や家庭科の教材は自己負担である。交通費や昼食代もかかるのである。

タガパン家は2階建ての長屋の一角に住んでいる。長屋の玄関を入ると、1階に2部屋、中2階に1部屋、2階に2部屋ある。急な階段で1、2階がつながっている。水浴び場・トイレは1階で共同。エディセルさんの母がこのユニット(1角)を所有しており、母の兄弟5人の家族が住みこんでいる。エディセル家族5人は母の部屋に間借りし、家賃はかからないが、電気・水道・食事を負担しているという。一部屋に家族5人が住み込み、どう見ても手狭である。できれば、自分の家に住みたいとエディセルさんは語る。近所に海外出稼ぎに行った人がおり、家を建てたが、別の場所に家を建てたので、トンドにその人の家はない、親戚などには海外就労はないとのことだった。ちなみに、政府が子どもの就学、母親の出産前後の診療を条件にお金を給付する条件付き現金給付(CCT=Conditional

Cash Transfer) 政策については、聞いたこともないし、恩恵も受けたことがないようだ。



タガパンさん家族（前方5人）と。
マリースちゃん、エディセルさん、ジョージ Jr.
君、ジョージさん、ジュリアンちゃん



タガパンさんの家

夢・・・ネグロス

西ネグロス州ラ・カルロータ市カネシゲ・ファームでも学生たちが若い男性研修生5人に夢は何かと聞いていた。年は22、24、29、34歳などである。22歳のジョエル（1期生）は養豚、24歳のジョンンはバイス出身(ATCが最初にバナナを買い付けた村)、29歳のレネは野菜担当、34歳のジョマールは野菜、ココナツ担当である。農業研修の期間は1年間であり、2009年に1期生4人を迎えた。研修後、うち2人が村へ戻らず、農園に残った。2期生も4人いたが、1人がここに残った。他の3人は農業に不熱心で農園でも勝手に豚を売りさばいたりしていたそうである。現在の3期生は厳選され、2名のみである。よって、1期生2名、2期生1名、3期生2名が話し合いに参加した。

ちなみにファーム所長のカルロス・バルコマさんはラ・カステリアーナ町サン・フリアン農園出身の農民であり、妻はピンピン・バルコマさん。息子さんはファームの1期生の一人であり、研修後、サン・フリアンに戻り、2haの土地で養豚、養鶏をしながら、農業を続けている。私はフィリピンの農地改革に関する調査で2002年にサン・フリアンを訪問したことがある。1986年に結成された日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の支援を受けながら、当時、農地改革の恩恵も受けつつ農民たちは自立を目指していた。2008年JCNCは解散し、その活動はAPLAに引き継がれたが、APLAが運営するカネシゲ・ファームを通じて、サン・フリアン農民は自助努力を続けている。

さて、夢は何かという質問に対して、研修生たちから5つの答えが返ってきた。

- ・カネシゲ・ファームを大きくすること
- ・弟、姉がハイスクールを卒業してほしい

- ・カネシゲにいたい
- ・自分の村にもどり、自分の家族を幸せにしたい
- ・農民となって、弟たちの学費を出したい

カネシゲ・ファームを大きくすること、そこに残りたいという声と、兄弟の教育を支えること、家族を幸せにしたいという声に分かれた。

対して、日本の学生の夢はなんですかと、APLA の大橋成子さんから質問が出た。すると、やさしい人になりたい、世界に行きたい、国際協力したい、飢餓をなくしたい、いろいろな国に目を向けたい、児童労働をなくしたい という答えが学生から帰ってきた。家族や兄弟に関する「夢」はない。なぜだろうか。

他方、フィリピンの研修生が兄弟、家族のことを考えているのはなぜだろうか。なぜ、こういう違いがでるのだろうか。日本の学生は家族や兄弟のことを考えていないのだろうか。自分一人で生きているという感覚が強いのだろうか。家族、兄弟より、まず自分という発想なのだろうか。反対になぜ、フィリピンの人はまず兄弟、家族のことを考えるのだろうか。恵まれない境遇ゆえに、学校に行けていない弟、姉のことを考慮するのか。苦しい家族のことを思うのか。なおかつ、キリスト教の影響もあり、人との分かち合いを大切にしている価値観が根づいているのだろうか。

大橋さんはこうした違いが興味深いと指摘していた。まったくである。学生はフィリピンの人たちが家族や兄弟を思う絆が強いと言っていた。では、なぜ、日本ではそういう絆が弱い、弱く感じられるのだろうか。



カネシゲ・ファーム 研修生と
交流 At Kaneshige Farm with
young trainees



同、記念写真 研修生たちや所長バルコマさん（後列中央）、カネシゲ・ルーラル・キャンパスのコーディネーターフレッド・アンボさん（後列右）、大橋成子さん（後列左から2番目） With Mr. Balcoma, Mr. Alfredo Ambo, and Ms. Seiko Ohahi

最後に

今回の研修では事前の準備から研修中まで様々な人々のお世話になった。それらの人々すべてにお礼申し上げたい。

研修に関わった延べ10人の学生が今回のツアーを生かして、どうやって勉強して、生きていくか、その後が楽しみである。

Happiness and Dreams

Masaaki Satake Ph.D.

We have completed two-week study tour program in the Philippines. I would like to convey my deepest gratitude to all the people who supported our program.

Happiness and Dreams

Our students asked questions to the residents of Tondo, a community of urban poor, regarding when they feel happy. It was a curious, albeit being a naïve, question.

A mother, aged 32, of 3 children, answered. "I feel happy when my children are healthy. Every day I feel happy when we are healthy."

This can be taken at face value without being questioned further. Still, when our student asked her what she expects from the Philippine government, she said. "It is good that the government raises salaries of government officials by 30 percent, but it will be better if there are more medicines at the Barangay health center. Also, it will be better if the government provides more support for education." This means that as there are not sufficient amounts, or varieties of medicine at the health center, she has to buy expensive medicine by herself. Also, although the education at public primary and secondary level in the Philippines are free, parents have to spend money for school supplies and projects.

It is also interesting to take note of responses of five young trainees at Kaneshige farm in Negros Occidental. Asked what kind of dreams they have, they said as follows: "To expand the Kaneshige farm." "I hope that my younger brother and elder sister will graduate from high school." "I want to remain in the Kaneshige farm." "I want to return to my village and make my family happy." "I want to be a farmer and support the education of my younger brothers."

Having heard of these responses, Ms. Seiko Ohashi, our coordinator in Negros program asked our students regarding what kind of dreams they have. Here are the answers.

"I want to be a tender person."

"I want to go to many countries."

"I want to engage in international cooperation."

"I hope that there will be no hunger in the world."

"I want to visit many countries."

"I hope that there will be no child labor in the world."

No Japanese students referred to their siblings or families. What made the difference? Do the Japanese youths assume that they can do anything and everything without the help of families? Families and siblings have little value for them? Then, on the other hand, why do Filipino trainees prioritize their siblings and families? Seeing their siblings unable to go to high school, can't they turn their eyes from their siblings? Seeing their families in a hard situation, do they think what to do? There also seem to be an influence of Christian value of sharing with others, especially those who are in need of help. Ms. Ohashi pointed out it is interesting to reflect upon the differences of opinions between Filipino and Japanese young people and think what causes the differentiation. Our students also noted that the Filipino people value their families. Then, how about the Japanese? We should think further about this. It was a good opportunity for our students to interact directly with young trainees at the farm.

Gratitude

Finally, I would like to thank again all the people that supported our study tour.

Maraming salamat sa inyong lahat!

Doumo arigatou gozaimashita!



At Panasonic Manufacturing Philippines Corp: With Mr. Waichi Tamiya(2nd right, 3rd row), Mr. Oimatsu Muneyuki(further right, 3rd row) and Mr. Tadahiko Hayakumo (right, 1st row)



At Japanese Studies Program, Ateneo de Manila University: With Dr. Hiroko Nagai (right, 3rd row), Dr. Karl Chang (right, 2nd row), and Prof. Tito Valiente (right, 1st row)



With Ms. Harriet Escarcha (KPAC, 2nd left, 1st row), Mr. Kei Fukunaga (Japanese Embassy, 2nd left, 3rd row) and Mr. Mamoro Miyagi (do, 3rd left, 3rd row)

フィリピンで行った国際協力実習の意義と価値

引率教員 石崎程之
Dr. Noriyuki Ishizaki

今年も国際協力実習（スタディツアー）をフィリピンに学生 10 名（現地参加 2 名含む）を引率して行った。8 月 25 日（土）から 9 月 8 日（土）にかけての 2 週間の日程である。

まずは引率した学生全員が大きな病気やけがをすることなく無事にこのプログラムを終了できたことを喜びたい。また、昨今の経済情勢厳しいなかで参加費をご負担いただいた保護者の方に感謝申し上げたい。例年、学生の中には自分でアルバイトをして参加費を負担している者もいると聞いている。彼らの向上心と努力にも敬意を払いたい。

そして、忘れてはならないのは、現地で受け入れてくださった方々の協力があっこそ成り立つプログラムであることである。今回も多くの方々にご協力いただいた。日本大使館、JICA、アテネオ大学、パナソニック、現地で活動されている NGO である KPAC、マリガヤハウス、APLA。我々の学生のために貴重な時間を割いてご対応いただき、有益な機会を提供してくださったことに、まずはお礼を申し上げたい。



この国際協力実習は学科創設以来の伝統的プログラムであり、2007 年のフィリピンを皮切りに、2008 年マレーシア、2009 年タイ・ラオス、2010 年ラオス、2011 年東ティモールと休むことなく続けてきた。学生の安全管理、健康管理を行いながら、日本のようにスムーズにいかない環境でプログラムを滞りなく実施していくことは、実は、教員にとっても負担は大きい。

しかしながら、途上国という厳しい環境がそうさせるのか、それぞれの国で国造りを行っている人々の情熱に感化されるのか、日本人の方々がひたむきに活動している姿をみて自分自身を奮い立たせているのかは分からないが、とにかく学生たちは大きなものを得て日本に帰国している。今年、海外に中長期で留学した 2 年生 8 名のうち、昨年の東ティモールスタディツアー参加者は 5 名含まれていた。中長期とは 6 か月以上の留学で、現地の大学に籍を置き現地で生活しなければならない。学生にとっては心理的な負担も大きいだろうし、語学の壁も立ちはだかっている。

毎年行っている途上国での実習で、彼らの目が外に向けられ、さまざまな壁を乗り越えていくたくましさを身に付ける。我々教員にとっても教育の効果を実感できる瞬間である。だから、負担は大きいけれども止められない。

さて、前置きが長くなった。今回の実習を振り返り、実習の意義を考えてみたい。国際協力実習は、国際協力論など教室で学んだことを現地で実際に確かめるというカリキュラム構成になっている。旅行では決して行けない訪問先を、教員が長年培ってきた信頼関

係に基づいてアレンジしている。今回の実習で 3 日目に訪問したトンド地区もそのような場所の 1 つである。

トンド地区はマニラ有数のスラム地区であり、かつてスモークマウンテンと呼ばれたゴミ捨て場があった場所である。ガイドブックには「危険であり近づかないように」との注意書きがあるそうだが、我々はトンドで長年活動をしてきた KPAC の協力を得て、トンド地区に入り、この地域の 3 家庭でインタビューを行うことができた。

私と学生 3 名が訪問した家庭では、その家の所有者である女性（50 歳）は 2 年制の職業専門学校（Vocational College）を卒業していた。フィリピンで専門学校卒業という学歴はかなり高い部類に入る。しかしながら、シングルマザーであったため、結局、2 人の息子には小学校しか卒業させることができず、息子 2 人のうち 1 人は無職で、もうひとり（22 歳）がペディキャブ（Pedicab）とよばれる乗り物の運転手をして、一家 7 人の生活を支えている。家には TV などの家電はなく、生活もその日乗り切るのがやっとという感じであった。ペディキャブの稼ぎはお客さん次第であるが、案内してくれた NGO の人は、1 日 80 ペソから 400 ペソの範囲で、400 ペソ稼げる日は少ないであろうと教えてくれた。



もう 2 軒のうち 1 軒は奥さん（33 歳）が専門学校を卒業し、コンピューター技師として働き、一家を支えている。この奥さんの日給は 445 ペソであり、比較的ゆとりがあるように見受けられ、この家庭にはブラウン管 TV などもあった。もう 1 軒の家庭は、大学中退の世帯主（男性：46 歳）が電機関連会社で正社員として働き一家を支えていた。子どもは 5 人いるが、年長者 3 人は大卒、高校在学中であり、きちんとした教育機会が与えられていた。こちらの家にもブラウン管 TV などがあった。

トンドという貧困地区にありながら、教育機会を生かして貧困から抜け出そうとしている家庭がある一方で、同じような教育機会を得ながらシングルマザーが転機となって次世代に教育機会を受け継ぐことができず、貧困が世代を超えて再生産していた。教育の持つ重要性、貧困層であっても教育機会が保障されれば貧困から脱却できる可能性をこのケースから学ぶことができる。教室では決して学ぶことのできないものを学生たちは見聞できたであろう。

今回の実習では、4 日目に JICA 事務所と技術協力プロジェクトの実施機関であるフィリピン地震災害研究所を訪問した。地震災害研究所では、日本がフィリピンに技術移転をするという関係をすでに卒業して、対等な立場で技術協力を行っていた。訪問前は、まだまだ先という印象を持っていたが、フィリピンもタイやマレーシアと同じく日本の ODA を卒業する日が近づいてきているのかもしれないとの思いを強くした。



5 日目には、課長島耕作（その当時はまだ課長だった）のモデルにもなったパナソニック・マニファクチャリング・フィリピン社を訪問した。フィリピンの消費者を所得階層別に 5 区分し、それぞれの生活様式とその生活での家電の使われ方を想定したうえで商品開発をされていた。フィリピンの富裕層には最新式の全自動洗濯機が売れないという話を聞きいたときはなぜだろうという疑問を抱いたが、洗濯はメイドさんの仕事であるという答えを聞いて納得した。相手の国で異文化をきちんと理解するということがビジネスの上でも重要であるということ、我々の学生も理解したに違いない。

6 日目にアテネオ大学を訪問した。アテネオの学生とうどん作りを楽しみ、大学キャンパスツアーを行った。学生たちの交流の様子を観察して、後日行われる市内観光にアテネオの学生に同行してもらうようお願いした。突然のお願いにもかかわらず快く引き受けていただいたアテネオの学生諸君に感謝したい。突然のアレンジであったのでどのような化学反応を起こすか楽しみであったが、市内観光が終わるころには両者とも非常に打ち解け、教員の入り込む隙間も見当たらなかった。「異文化理解」と身構えなければならない場合もあるが、自然と異文化の中に溶け込んでいく場合もある。年をとればとるほど異文化は壁として立ちちはだかるが、若ければ若いほど自然と異文化を乗り越えていける。アテネオ大学は我々の大学の留学協定校でもある。これからも我々の学生を受け入れ、国際人としての資質を身に付ける機会を与えてもらいたいと願っている。

7 日目に訪れた大使館では、外国学部の卒業生である宮城君が勤務している。彼にはさまざまなアレンジでお世話になった。大使館の業務は日本にはなかなか想像できない。普通の旅行者であれば立ち寄ることはほとんどない。パスポートを紛失した場合に行くぐらいである。今回、JICA から出向されている福永さんがミンダナオ和平に日本としてどのように関わっているかを説明してくださった。学生も大使館が日本政府を代表してさまざまな業務を担っていることを理解したであろう。また、先輩として働いている宮城君から大いなる刺激を受けたことと思う。宮城君の今後の活躍に期待したい。

同じく 7 日目に訪問したマリガヤハウスでは日比混血児の問題を間近に感じるようになった。日比混血児は、多くの場合、フィリピン人女性と日本人男性の間に生まれた子どもであり、バブルの時にエンターテイナーとして来日した女性との間の子どもが多いそうである。マリガヤハウスは「子どもの養育は両親の責任であり、大人の都合で放棄することはできない」との姿勢で、養育を放棄した父親に養育を求める運動と認知を求める運動を行っている。しかしながら、認知されたとしても負の遺産（親の負債）を引き継がなければならないなど難しいケースもあるようだ。私たちは日比混血児の母親の家庭を訪問したが、彼女はバブル期に来日している。そのため、日本はいまでも経済力があるとの幻想を抱いているようであり、子どもが認知され日本国籍が得られれば、子どもを豊かな日本で働かせることができると考えている。現在の日本では日雇い労働者や高齢者の孤独死が社会問題になっている。日本国籍を得たとしても日本で職を見つけられるか、見つけれられた

としてフィリピンで暮らすよりも幸せな人生が送れるかなど、難しい問題が存在する。

9日目からネグロスに入った。ネグロスでは APLA と関連団体である ATC (Alter Trade Cooperation) を訪問した。私のゼミでは毎年必ず 1 名はフェアトレードで卒論を書きたいという学生がいる。フェアトレードという言葉を知っており、フェアトレード商品を買ったことがあっても、フェアトレード商品がどのように生産され、どのように流通し、結果としてどれくらいの利益が生産者に還元されているかを、実際にみる機会は少ない。砂糖の国際価格暴落を契機としたネグロス危機のなかで、九州のグリーンコープと APLA が中心となってバナナのフェアトレードが始まった。フェアトレードという言葉が日本に定着する以前から活動は始まっており、まさに日本のフェアトレードの草分けである。学生たちにとっては、フェアトレードがなぜフェアなのかを考える契機となったに違いない。

ネグロスでは青年海外協力隊 (JOCV) の活動地である TESDA を訪問させていただいた。帰国間近でお忙しいところを協力隊員の菅野さんにお世話になった。私も協力隊 OB であるが、協力隊はもっとも身近な国際協力のひとつだと考えている。学生と年齢も近く、学生にとってもよい刺激になったのではないかと思う。今回のスタディツアー参加者の中から将来 JOCV として活躍する学生が出てきてほしいものである。

最初にも述べたが、このスタディツアーは多くの方の協力なくしては成立しない。今回、我々を受け入れて下さった方々に、お一人ずつ名前を挙げることはできないが、再度感謝申し上げたい。参加した学生にとっては、大学時代の思い出の一つになるとともに人生の糧にもなると確信している。

First of all we have to express our gratitude to the people who accepted our students and provide invaluable opportunities to them.

This is the 6th study tour of our Department since 2007, when our members visited the Philippines at the beginning. Thanks to all the people who kindly helped us in the Philippines. We could finish this program successfully and with no accidents.

Our students have experienced a lot in the Philippines that they never experience in Japan.

For example, in Tondo area, that is one of the biggest slum in Manila, they interviewed 3 households and found out that poor people are very vulnerable to risk and educational opportunity is very important means to escape from poverty.

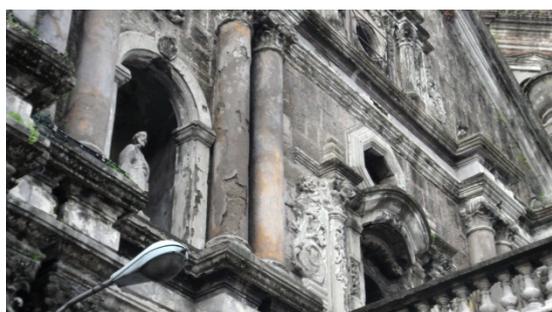
There is no doubt that the experiences in the Philippines will encourage the growth of our students.



二週間のフィリピン

河路 直人 Naoto Kawaji

私は、今回初めての海外訪問でした。それが学生最後の夏休みの締めくくりになりました。今回、フィリピンへのツアーに参加したのは、私の学部で学んできた発展途上国を自分の目で確認しておきたかったからです。フィリピンは、治安が悪い、危ないと周りの人



(上写真サンオーガスティン教会)

に言われていましたが、私はそんなことないと言っていました。しかし、フィリピンに着いてカルチャーショックを受けました。まず、キリスト教の国が、私にとって初めての経験であったため、教会に集まってお祈りすること、また建物の中が暗く見えたので、怖い印象を受けました。

また物乞いの姿も見かけました。着いて早々にこのようなことを感じましたが、それは、極めて一部であり、実際には、日本人に対して、とてもウェルカムな国で、いろんな方に日本人という、日本人は綺麗で、結婚して日本で暮らしたいという方が多かったです。とても友好的で、笑顔が素敵でした。また、暖かい気候なためなのか、沖縄にとっても似ていました。

またネグロス島では、サトウキビ栽培があり、沖縄と同じように自然が綺麗でした。また、住という点では 高床式の家がネグロスでは見られたが、マニラ首都圏マカティでは、高層ビルで、あえて例えるなら東京みたいであった。また、マニラ、ネグロスでも道路に信号等が無く、道路を横切る際には、勇気が必要でした。これも文化の違いで歩行者がぶらぶら歩いていると大変危険で事故になったら助けてもらえないということで気をつけて行動しました。

私たちが事前に準備した、アテネオ大学でのうどんづくりですが、現地の火力、料理器具などが日本とは違い、正直大変でした。それでもうどんは美味しく出来てよかったです。アテネオ大学生にはとても親切にいただき、グリーンヒルズの案内等していただきました。

また、ネグロスのカネシゲファームでは、言葉が通じない、英語も通じなかったのですが、コミュニケーションは、ジェスチャーなど、単語などで分かり合うことができました。通訳も英語の話せる運転手さんにイロンゴ語に直してもらったり、大橋誠子さんには、言葉が通じなくてもコミュニケーションをとることが大事で日本人はそれが苦手だから、ど



(上写真マカティの高層ビル)

んどんコミュニケーションとってと言われたので、楽しむことができました。大橋さんには大変お世話になり感謝しています。

今回の経験を通して私はとても成長することができました。

Thank you for everyone. I visited the Philippines for the first time. This tour was a very good experience for me. I will be back soon ! I want to meet friends again.



(ネグロスのハイスクールでの写真)

フィリピンの現実～視点を変えてわかったこと～

中村 泰大 Yasuhiro Nakamura

今までフィリピンでの留学やインターンシップを経験し、フィリピンのことを多少理解はしていたつもりだった。つまり、2010年8月から11年3月までのフィリピン大学への留学、11年8月から12年8月までのNGOインターンを経験していた。しかし、今回のスタディツアーでいろいろな視点からフィリピンを見ることによりまた新しいフィリピンが見えてきた。

まず一つ目の視点として、「貧困の中の貧困」である。今回、トンド地区というマニラの貧困層が住んでいる地域で家庭訪問を各グループで行ったが、家庭によって貧しさの度合いも随分変わっていた。子どもを大学まで行かすことができた家庭や子どもを小学校にすら行かせられない家庭など、トンドという地域の中ですら家庭によって貧しさの度合いが違っていた。また、学歴がなければ安定した仕事を見つけるのが難しいフィリピン社会で、後者のように子どもを学校に行かせることができない家庭は貧困から抜け出すのはとても難しい状況である。このように、貧困が貧困を生んでいるというフィリピンの現状を目の当たりした。

二つ目の視点は、「富裕層、中間層」である。フィリピンのような東南アジアの国々は日本から見ると「発展途上国」や「貧困」という言葉が連想されやすいと思うが、フィリピンの約24%の人が富裕層、中間層というのが実情である。そして、今回のスタディツアーで訪問したアテネオ大学というのはフィリピンではお金持ちの人しか通うことができない名門大学として国内では知られている。私が留学していたフィリピン大学（フィリピンの国立大学）よりも校舎は立派で、日本の大学と遜色ないくらいであった。敷地面積も大きく、むしろ、日本の一部の大学よりも勉強環境が整っているともいえる。また、アテネオ大学の学生もスマートフォン、カメラなどを持っていたり、留学経験があったりと日本の学生とさほど変わったところが見当たらなかった。また、フィリピンの富裕層、中間層の間には車の運転手やお手伝いさんを雇う家庭も多くあり、日本人以上に良い生活をしている人たちがいる。このように視点を変えることによって、フィリピンにはいろいろな生活レベルの人がいることが分かった。

最後の視点は、「日系企業」である。今回、私たちはパナソニックの工場を訪問して、実際にフィリピンで働いている日本人の視点から話を聞くことができた。その中でも日本人から見たフィリピンでのマーケティング、またフィリピン人についてなどの話はとても興味深かった。特にフィリピンに適した商品を作成するためにフィリピン人の生活などをパナソニック独自で調査したデータは驚きだった。特に、フィリピンではお手伝いさんが洗濯をしてくれるため高機能の洗濯機は必要ないという話は、フィリピンに住んだ経験がありながらまったく考えたことのない発想であった。また、洗濯をするお手伝いさんは「商売の敵」だとも言っていた。さらに、日本と同じものを売るのではなくその国にフィット

したものを製造しているという話はとても興味深く、外国でビジネスをするには臨機応変に対応していく必要があると感じた。

このように今回のスタディツアーでいろいろな視点からフィリピンを見ることによって「格差」という問題が浮き彫りになってきた。確かに貧困というのは大きな問題だが、そこに格差という問題が組み合わさることによりこの貧困問題がさらに複雑化しているように感じた。そして、パナソニックの商品が富裕層、中間層向けに作られている話を聞き、富裕層や中間層と貧困層の間には大きな溝があるのではないかと改めて感じた。今まで、フィリピンへ留学、インターンシップを経験してフィリピンの貧困問題には目を向けてきたが、今回、いろいろな視点からフィリピンや貧困を見ることにより、もう一度フィリピンにある貧困を考える良いきっかけになった。そして今回のスタディツアーにより、貧困というものがいろいろな要素が複雑に絡み合っていてきている問題だという点が、仮定から確信へ変わった。これから貧困問題を解決していくためにも、一人ひとりが貧困という問題と向き合って自分のできることを持ち寄ることにより、よりよい社会、平和な社会へと変わっていくのではないか。

During the study tour, I saw the Philippines from a different perspective. I am reminded again there is poverty in poverty area, and that there are also rich people in the Philippines. Then I realized there is wide gap between the rich and the poor, this makes poverty issue more difficult and more complicated to understand. I hope everyone will think about what poverty is all about and what to do to eradicate it. I am sure that the world will be more comfortable and peaceful then.

Marami pong salamat sa iyong kabutihan noong study tour namin. Naging matagumpay ang aming study tour at lubos po akong nasayahan kasama kayo. Muli, maraming salamat po.

私の目から見たフィリピン

奥村直子 Naoko Okumura

このスタディーツアーは私にとって、とても内容の濃い、充実した二週間でした。毎日多くの人と出会い、見るもの、感じるもの、聞こえてくるもの、それぞれ全てが私にとって魅力的で、普段の生活ではなかなか味わうことのないものでした。

はじめに、マニラには、様々なもので溢れ、賑やかだという印象を受けました。タクシーやトライシクル、ジープニーが街中を走り、市場には多くの人がいて、気軽に話しかけてくれる人達も多く、道を歩くだけでも楽しかったです。

日本にはないフィリピンの良さが徐々に実感できたと共に、同じフィリピンかと思うほどの貧富の差がそこにはありました。変わりつつある現状と変わらない現実が混合していて、数年後ここは変化するのだろうか、人々の生活は少しずつ改善するのだろうか、と自分なりに考えることが次々と頭に浮かびました。

私が見たフィリピンはほんの一部だと思います。それでも今、フィリピンで人々の生活を考えながら働いている人やもっとよくしていこうとしている人達、一人一人にお会いし話を聞いたことは私にはとても大きなことでした。

様々なフィリピンの様子を見て、私が目にした光景はきっとこれからも忘れることなく頭の中に焼き付いていくと思いました。私はこの二週間でフィリピンの人々が生活をする姿をきちんと見る事が出来て良かったと思います。



(ネグロスのカネシゲ・ファームにて)

I thought about a lot of things during two-week long study tour.

For example, I saw different aspects of Philippine society and I listened to different stories during my stay.

We were able to experience many things because you helped us in many ways. Thank you very much for all you have done for me.

I will learn more about many things about your country as I am going to stay for 6 months more in your country as an exchange student. Thank you very much.

スタディーツアーの感想

棚橋 有里 Yuri Tanahashi

今回のスタディーツアーで、現在、世界の至る所で起こりつつある社会問題を目の当たりにしました。先進国を除いて、途上国やこれから発展していきだろ新興国は成長のスピードがとても速く、それについていける人々についていけない人々との間に大きな経済格差が生まれています。急速に成長する社会で求められる制度や法律が制定される前に次の問題が生まれ、社会的弱者が取り残され格差が広がり途上国や新興国ならではの社会問題が世界各地で起こります。これらの問題にどう対応していくのか、それがこれからの課題だと感じました。

I saw social problems with my own eyes. They have been happening all over the world. Speed of the economic growth is rapid in a developing country. Big gap of income appear between the people. A lot of remedies are necessary for such social problems, but a new problem will happen while people are thinking. The socially weak will increase and the gap will spread in such countries, including the Philippines and Japan. I felt it is the most important problem that we have to think about now.

(写真 後列 中央が筆者 トンドにて)



フィリピンスタディツアーに参加して

泉 あやの IZUMI AYANO

8月25日から9月8日の2週間にわたってフィリピンでのスタディツアーに参加しました。私は小学生の頃から海外、特に発展途上国について興味があり、いつか海外に行きたいと思っていました。今回やっと、このような機会を頂いたので参加を決め、フィリピンと日本との様々な関係やフィリピンという国の事情を少しだけ知ることができました。

事前学習では、フィリピンは貧富の差が激しく街中は裕福な地域と貧しい地域と分かれているという印象を持ちました。日本でいう都会と田舎みたいに。しかし、実際にその場に行き、車で移動していると大きなビルや建物の横にスラム地区のような場所があり、大きな衝撃を受けました。地域別に分かれているのではなく、貧富の差はすぐそこにあるのだと。スラム地区のような場所ばかりではなく、フィリピンには Mall of Asia などの大型ショッピングセンターもあり、経済が発展している場所もあるのだとも思いました。

一番印象に残っている訪問先はマニラにあるトンド地区という都市低所得地域です。最初の印象では、そこは貧しい人たちが瓦礫で作った狭い家に家族や親戚とギリギリの生活を送っているものだと思っていました。しかし実際に自分の目で見てお話を伺うと、初めの印象とは全然違っていたことにびっくりしました。私が伺ったお宅のお父さんは家電修理の正社員で、子供たちはみんな学校に通い、一番上のお兄さんは大学にも通っているそうです。このお話を聴く限り、ここは普通のお宅だと思いました。しかし、なぜ低所得地域に住んでいるのか、なぜ別のところに移住しないのか疑問に思い、その点をお母さんに聞いてみました。すると、小さいころから住んでいるからここが自分たち家族の家だとおっしゃっていました。それを聴いたとき、貧困地区ではあるけれど、ここがこの彼女たちの住む場所なんだなと思いました。トンド地区に暮す人々は、必ずしも私が訪問したお宅のような生活が出来ているわけではありません。むしろ、こういうご家庭が少ないのがトンド地区の現状です。子供たちを学校に行かせることが出来ない家族や仕事がない人、仕事はあっても一日に一日暮すだけで精一杯の給料しか稼げない人が多くを占めているのが今の低所得地域の現状だと知りました。

マニラ観光やトンド地区、JICA、フィリピン地震災害研究所、パナソニック、アテネオ・デ・マニラ大学、日本大使館、マリガヤハウス、オルタートレード・コーポレーション、砂糖農園、バナナ生産地、カネシゲファーム、小学校訪問、ホームステイなど、観光では訪れることが出来ない、様々な場所に訪問することができ、今回は本当に貴重な体験

をすることが出来ました。実際に目で見て、話を聴き、その場所に行くという事にどれほど大きな意味があり、また、自分たちがどれだけ裕福かという事を思い知らされました。日本で本を読み、話を聴いて知ったつもりでいたことが、どれだけ現実や自分の価値観と違っていたのか、その場所に行くことで改めて実感することが出来ました。一度は絶対に海外に行ったほうがいい。絶対に考え方や見方が変わるからと周りのたくさんの先生や先輩から聴いていました。そして、実際に行ってみると本当に行ってよかった、特に初めての海外が東南アジアで本当に良かったと思っています。もし機会があれば、再度フィリピンに行きたいと思っています。これをきっかけにフィリピンをはじめ、できるだけ多くの国に行き、その国の現状を見ることができるといいなと思います。

It was really valuable to join the Philippines Study Tour. I met a lot of people and it was really interesting to hear the stories. We were able to visit a lot of valuable places such as low-income communities, the Japanese Embassy, JICA, Ateneo de manila University, Kaneshige Farm, and homestay. It was very good experience for me to stay the Philippines during two weeks. Thank you very much!



Valuable experiences in the Philippines

私が今回のフィリピンスタディーツアーに参加した理由は、夏休みを利用して何かしたいなと思っていただけです。

実際にフィリピンに着いて感じたことは、車がすごく多くて驚きました。そして街に信号があまりなかった点にも驚きました。先生の話や祖父の話でフィリピンでは子供に物乞いをさせるということを知っていたのですが、実際に現地で幼い子供に物乞いをされると自分が想像していたより辛かったです。この他、ネグロス島でカネシゲファームに行ったときに夕食の前にカネシゲファームで働いている人たちの話を伺ったとき

に、自分はお金の都合で大学に行きたくても行くことができなかった。なので、このような思いを妹にはさせたくないで、自分が働いて妹を大学に行かせたいと彼らが言っていた。私と同じくらいの子がこのことを話していて、私より随分と考え方が大人だなと感じました。私は、自分の欲しいものや、やりたいことの為に、アルバイトをしてきたのでフィリピンの人は、自分の為でなく、家族の為に働いていてその姿勢に感動しました。そして、カネシゲファームではトイレは自分で水を流して使わなければなりません。もちろんこの方法でトイレを使用したことがなかったので、大変でした。あと、シャワーはお湯がなくて大変でした。けれども、こういった経験はなかなかできないので、貴重な経験ができてよかったです。

私は今回のフィリピンスタディーツアーに参加して、2週間という短い時間でしたが本当にいろいろな方々と交流することができ、いろいろと考えさせられました。マニラのホテルに宿泊していて各自食事をとるときに、ピザを食べに行ったときに定員さんと仲良くなれたり、ホテルで働く人と一緒に写真を撮ったりフィリピンの人たちは話しやすく、親切だったのでとても過ごしやすかったです。こういった楽しい経験もたくさんありましたが、その反面、物乞いをされるなど悲しい気持ちになることもありました。だから、なぜそうした物乞いの人がいるのか、また、どのようにしたら物乞いの人々を減らすことができるかという疑問を解決する為、国際協力について更に学びたいと思いました。

I had a very nice time in the Philippines . Filipino people whom I met in the Philippines were very kind and cheerful.Fortunately I was able to have chances to meet a lot of people. I'll never forget these experiences. Thank you for giving this valuable opportunity for me.

古久根寛二 Kanji Kogune



フィリピンを訪ねて

戸津龍乃 Ryudai Tozu

途上国に行くのは初めての経験で、行く前はとても不安でいっぱいでした。しかし、いざフィリピンのマニラに着くと高層ビルが立ち並び、コンビニや大きなスーパーマーケットもたくさんあり、きちんとインフラも整備してあり驚きました。しばらくして僕は街の市場に行きました。そこで初めてフィリピンの格差を目の当たりにしました。そこには、手を出して物乞いをする子供たちや道端に寝そべる人がいて、商品の果物にはハエがたかり、道路は下水道にごみが詰まっていて水はけが悪くなっているため悪臭や水たまりにボウフラが湧いていました。

数日後、僕はトンド地区というスラム街を訪れました。貧困層には変わりないが想像していた程ではありませんでした。インフラも整備されており、ガスや下水道も整理してあるスラム街でした。都市部の子供達とは異なり、スラムの子供は誇りを大切にしているのか物乞いをする子供は一人もいませんでした。むしろ生き生きとしておりカメラを向けると笑顔を振りまいてくれました。しかし、スラム街はスラム街であり、訪れた家庭は7人家族であるにもかかわらず働き手は一人で、ペディキャブという日本という自転車版のタクシーだけで家族を養っています。片や、マカティという都市ではグロリエッタという巨大なモールや高層マンションがあり、富裕層はそこに家政婦付きで住んでいるという現状を目の当たりにしました。



スラム街で暮らす子供達



農村で出会った子供達

数日後、ネグロス島という島に着きました。そこは「砂糖の島」と呼ばれるほどサトウキビを生産している島なのです。そんな、のどかな島にも格差はあり砂糖農園の地主が土地を牛耳っているため、農民は非常に低い地位に置かれているのが実状でした。



そんな中、訪問先の民衆交易を行なっているオルタートレード・コーポレーションの方々や独自の農業を若者に伝えていくカネシゲ・ファームという農場を訪れた時に、毎日が充実しているような感じで僕らを歓迎してくれました。

マナプラ町でホームステイをした時もホストのおばあちゃん(写真)が別れ際に泣いて抱きしめて「またおいで」と言ってくれてフィリピンの方々の温かさに感動しました。



フィリピンではトイレには便座がなかったり、水をバケツに溜めて桶ですくってお風呂に入ったり、食べ物にはアリやハエがたかっていたり、部屋には無数のトカゲ、断水が 22 時から翌朝 5 時からあり、日本では到底考えられないこともたくさん経

験しました。慣れないながらも楽しく毎日を過ごし、充実した生活を過ごしました。ぜひ、機会があればまた訪れたいと思っています。

We went to the Philippines for 2 weeks. Local people welcomed us kindly and we were pleased very much. They showed us to many wonderful spots and this was a good lesson for us.

I want to make the best use of this experience and travel the world again. Absolutely I want to go back to the Philippines again. Of course, when you come to Japan, I will welcome you. Thank you.

フィリピンで学んだ事

日沖諒太 Ryouta Hioki

今回のフィリピンスタディツアーが僕にとって初めての海外経験だったので正直、最初は期待よりも不安でいっぱいでした。特に、初日は下水道の設備不足や交通量の多さ、また小さな子どもたちが物乞いする姿を目の当たりにして驚きを隠せませんでした。しかし、そんな戸惑いも現地の方々が温かく受け入れてくださっておかげで次第に消えてなくなりました。

今回、たくさん場所を訪れ、数多くの方々と出会いました。中でも、こうした開発途上国で働く日本人の方々の活動を間近で見ることができてとても刺激を受けました。大使館や Panasonic、NGO 団体、青年海外協力隊、関わり方は違っても、現地の方と同じ立場で物事を考え、コミュニケーションをとっていっしょに問題を解決していることは共通していると思いました。これから国家間関係とはまた違う、民衆どうしの関わりがフィリピンだけでなく、ほかの国にもっと盛んになってほしいと思います。

ネグロス島で過ごした一週間は、都市部とは違って娯楽などの建物はあまりなかったけど、学校で子どもたちとボールを使って一緒に遊んだり、ホームステイ先の家族のみんなと海へ出かけたりと、とても楽しかったです。また、農場で採れた野菜や育てた鶏を食べ、自然の恵みを身を持って感じることができました。

そして、次のようなことも感じました。フィリピンの人たちはみんな家族思いで、自分より年下の兄妹がいると、自分の進学を諦めてでも兄妹に学校に通ってもらいたい、そして、学校に通わせてくれる親のために役に立ちたいと思っているということです。そのような助け合いや感謝の心から家族の絆を感じました。学校に行きたくても行けない子どもたちがいる中、いま、こうして学校に通わせてくれている親に感謝し、何のために学校に通っているのかを考え直し、これから有意義な大学生活になるよう努力を惜しまないようにしたいと思います。



I had not been abroad until I joined this study tour. I had many valuable experiences through this trip. I met a lot of people. Everyone is very kind. I'm glad that I met so many nice people. I will also try to study hard like you. I think this trip made me grown as a person and a student. I had a really good time. I want to meet you again. Thank you!

Salamat!!

森千紘 Chihiro Mori

今回のスタディーツアーは、私の持っていたフィリピンのイメージを大きく変えました。私はこのツアーが、初めてのいわゆる「発展途上国」への訪問でした。これから大学で、国際協力や外国語を学んでいくうえでこれらの必要性を知るため、そして、一度は自分の目で発展途上国の現状を見ておたいと思いこのツアーに参加しました。

路上で生活をしている人、私たちに物乞いをする幼い子、衛生状態の悪さなど、TVや本で見ていたものを初めて目の当たりにしました。しかし、貧しくても子供たちはとても明るく、純粋でした。私たちがスラムを訪れた際、彼らは温かく迎え入れてくれました。彼らは人と人との絆を大切にし、家族をととても大切にしていると感じました。生活は貧しくても、心はとても豊かで私も見習うべきところがたくさんあると思いました。

このツアーで私は、多くの方と出会いお話をすることができ、行ってみてわかる人々の温かさ、豊かさを感じることができました。私はもっと語学力を身に着け、フィリピンでお世話になった方々にもう一度会いに行き、このツアーで感じたことを伝えたいと思います。



↑ネグロス島で出会った子供たち

I had a really great time in the Philippines. I had a lot of good experience. This experience taught me many lessons which I'll never forget in my life. I will study English more, I will surely go to the Philippine again. I'm looking forward to talking with you again. Thank you.

Sana'y magkita tayo muli. Maraming salamat po!!

4. その他



フィリピン・スタディツアー (国際協力実習) 報告会



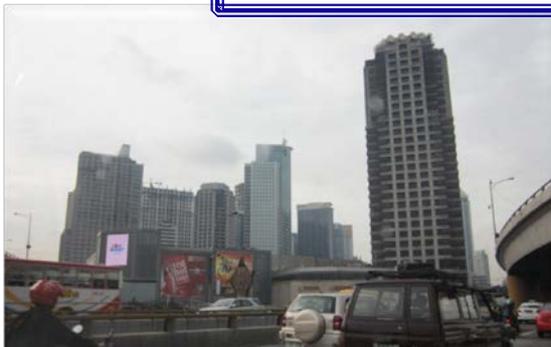
“ふつうに生きる”って、“海外で働く”って、どういうことだろう？
フィリピンの貧困地区を訪れ、その子どもたちの笑顔を見て何を感じたか、
国際協力に関わる人々は何んなことをしているのか。また、開発途上国であ
るフィリピンで働く日本人。考え方や文化も異なる国でどういったコミュニケ
ーションや工夫をしているのか、今回のツアーで体験したことをお伝えし、み
なさんにぜひとも考えてもらいたい。
“今、あなたにできること”

日時：10月24日(水) 1時限目 (9時10分～10時40分)

場所：名古屋学院大学 白鳥学舎 曙館302教室

8月25日～9月8日、「国際協力実習」という授業の一環として、8名の学生がフィリピンで国際協力や異文化について、学んできました。日本政府や民間団体による援助活動の現場、低所得地区、日系企業、名門アテネオ・デ・マニラ大学、サトウキビの島・ネグロス島などを訪ねました。そのツアーで体験したことをお伝えします。ぜひ、ご来場ください。

ギャラリー



マニラ首都圏のビル街



ネグロス島のサトウキビ畑と水牛



スペイン植民地時代の名残「石畳」



マニラ近郊の市場



スラム街の風景



トンドで出会った子どもたち



マナプラにて「折り紙の授業」



なぜか学校でサイン攻め



アドボ：肉を煮込んだ家庭料理



シニガン(右)：酸味のあるスープ



豚の丸焼き



海の幸と大根のスープ



鶏肉：白米おかわり自由で 200 円



ジョリビー：ハンバーガーチェーン



アテネオ大学でうどん作り



カネシゲファームでの昼食



J I C A



トンドにある幼稚園(KPAC)



地震観測を行うフィボルックス



P a n a s o n i c



日 本 大 使 館 前



パンダノン村でハイチーズ



青年海外協力隊の活動風景



カネシゲファームで記念にサイン

編集後記

今回のスタディーツアーは開発途上国であるフィリピンを訪れ、国際協力の現場や海外での働く日本人の姿を近くで見ることに重点をおいて行われました。

日本にいるときにはなかなか考えることのできなかつた、海外からみた日本の在り方や支援の状況について知ることができました。

フィリピンの様子をよりリアルに感じていただくために初のカラー出版をさせていただきました。今回、スタディーツアーという貴重な体験を支えてくださった方々にここでお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

日沖 諒太

フィリピンスタディーツアーの報告書の作業をやらせてもらい、フィリピンでの14日間の経験を一人一人が再び振り返ることができました。

フィリピンについて訪れる前にインターネットや書籍などを通じて調べてありましたが、やはり調べたことと実際のフィリピンとは大きく違っていました。

スタディーツアーに参加して日本には決して経験できないことをたくさん経験させてもらいました。その経験をこのように報告書として出版させてもらい、多くの方々に知ってもらえることをうれしく思います。

古久根 寛二

「フィリピンスタディーツアー報告書」

監修 佐竹真明 (国際文化協力学科)

編集 学生編集委員

河路直人、中村泰大、泉あやの、古久根寛二、戸津龍乃、日沖諒太、森千紘

発行 2013年 3月

発行機関 名古屋学院大学 国際センター

456-8612 愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1-25

TEL 052-678-4093 / FAX 052-682-6824

*Report on Study Tour to the Philippines 2012 organized by Department of
International Culture and Cooperation, Nagoya Gakuin University*

Edited by Masaaki Satake, Ph.D. Professor

March 2013

International Center, Nagoya Gakuin University

1-25, Atsuta Nishi-machi, Atsuta-ward, Nagoya-city, Aichi, 456-8612 Japan

TEL +81-52-678-4093

